

# 佛經佛傳と古代印度の地理

立 花 俊 道

## 【一】

印度人は一體に空想に富める人種であり、誇張に巧みな民族である。随つて印度文學はその何種のものたるを問はず概して空想を説き誇張を能事とするが如き傾きがあつて、古代支那人や希臘人の殘せる文學に比しては遙かに空想的であり誇張的であるやうに思はれる。この點は佛敎聖典に就いていつも大體同様で、佛典の中でも小乘律部は何といつても事實を記する所が多いやうだが、經と論とそれも特に大乘の經と論と、に至つては、その中に實際の歴史や地理を發見しようとするのは殆ど絶望といつてもよいほどである。例へば『法華經壽量品』の中にある、

「皆は今釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出てて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと惟へり」

の一文の如きは佛傳中の事實を記するものと見られぬでもない。即ち今の釋迦牟尼佛とは現身の釋尊で、歴史的人物、人間釋迦である。それが釋迦の宮を出るとは、所謂釋尊の大家を指せるもので、これも確かに事實であつた。その釋尊が伽耶城を去ること遠からざる一地點、それは勿論佛<sup>ブ</sup>陀<sup>ダ</sup>伽<sup>ガ</sup>耶<sup>ヤ</sup>の事であらうが、この佛<sup>ブ</sup>陀<sup>ダ</sup>伽<sup>ガ</sup>耶<sup>ヤ</sup>は伽<sup>ガ</sup>耶<sup>ヤ</sup>からは南方約七哩

の地にあるから、こゝに「遠からず」といつてあるのも當つて居る。その佛陀伽耶なる菩提道場、菩提樹下なる道場に坐して阿耨菩提を成就されたことも實際あつたことである。斯うしてこの短かい一文は皆實際上の事實を記するものであるが、『法華經』にこの事を記するの目的は、これは皆が眞實だと思つて居るであらうが、我が成佛已來、實は無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫を経て居るぞ、といったやうな事で、折角事實の記録と見えることも、自然否定されねばならないこととなつて居る。それでは斯うした佛典の中に實際事實の記載を見出すことは出来ないかといふに、全くさうだとは限らない。それに就て絶望の聲を揚げることはまだく早い。特に小乘經典や佛傳の中には古代印度の地理や歴史の片影を折々に發見し得ることがあつて、單にそれだけにしても佛經佛傳の研究は特に興味深きものとさればならぬ。

### 【II】

右に引いた『法華經』の文にしても、それを大乘教理上の取扱とすれば眞實ではない。眞理ではないが、「皆は惟へり」といふ上では、事實でないことを事實と誤り想つてゐるのではなくて飽まで事實であつた。即ち釋迦牟尼佛が、今この世で悟られたと見るのは大乘的に言へば眞理ではなく、一の迷妄であらうが、小乘的に言へば全く事實である。然らざれば佛傳は記録不可能となるであらう。

巴利文『大般涅槃經』二の八五及び『小品』六の二八、二九によれば、佛は最後年の遊行の際に那爛陀ナーランダーから波吒梨村バタリカに赴かれ、此處で同地の信者等の供養を受け、彼等のために法を説かれたことがあつた。その頃須尼陀スニダ、雨舍ワッサカといふ

兄弟二人の摩竭陀大臣は、この波吒梨村と恒河を隔て、對峙して居た毘提訶國の伐地族民を防がんがため、此處に都城を建設して居た。佛が其處を見渡されると、後日威力ある王大臣たちが、邸宅を構へさうな所には大威力ある天人が下つて來て其處を占領し、中若しくは小の威力ある王大臣が邸宅を構へさうな所は、中又は小の威力ある天人が降つて來て、それを占領して居ることが判つた。佛はこれを知つて、これは宛然三十三天と相談して工事をして居るやうであるといはれた。後日佛はこの兩大臣の棲所に赴いてその供養を受けられ、而して後其處を去られたが、兩大臣は佛の出られた門をば瞿曇門と名け、佛の河を渡られた所を瞿曇渡と呼んだ。この當時この波吒梨村はまだ一箇の村落であつて兩大臣の手によつて漸く都城の形を成さんとして居たのであるが、この地は四世紀の中葉孔雀王朝の旃陀笈多王以來、摩竭陀國の首府波吒梨子城となり又華子城として知られ、希臘人メガステネスにはパリボートラとして知られて居た。後西紀四世紀より六世紀に至る崛多王朝でもこれはやはり、摩竭陀國の首府であつたが、しかしこの地を特に著しくしたのは西紀前二七三——二三二年の間に阿輸迦王が、この地を中心として殆んど全印度に君臨した事實である。今のビハール州のパトナはその舊跡である。

## 【三】

佛經中にこの都城の建設を記するは全く偶然に過ぎぬが、この偶然の記事も、吾々をして當時何故にこの都城が築かれねばならなかつたかを思はせる所がある。即ちそれは摩竭陀人はこれによつて恒河の對岸なる毘提訶の地に住める強敵伐地子族を防がんとしたのであつた。「長阿含經」二卷遊行經並に巴利文「大般涅槃經」の劈頭に、摩竭陀國王阿闍

世<sup>カッタツ</sup>は雨舎大臣を遣はして、佛の安否を問はせ、同時に伐地子族を伐たんとするの意志を表示して、勝敗に就ての佛の意見を窺はせた。「中阿含經」三六卷、瞿默目捷連經には佛滅後間もなく、雨舎大臣は同じく、伐地子族に備へんがために、王舎城を固めたことが記してある。これ等諸所の記事に共通の點は、毘提訶洲に伐地子族といふ摩竭陀人の強敵があつて、彼等はこれに對し相當の防禦策を講ずるの必要ありしことである。さて此處で興味あるのは何故に摩竭陀人は防禦の地點として、この波吒利村（今のパトナ）を選んだかといふことである。これは古代印度で都城、特に城皆の用をなすべき都城は、主に二の河の合流點の上にある三角地に建てられたものであつた。この波吒梨城も確かにその一例で、恒河とその支流たるソーン河との合流點の上に建てられたものであつたが、後このソーン河はその河筋が移動した結果、舊合流點よりは十二三哩の上方にて恒河に流入することとなつた。ゆゑ、今のパトナはこの傳統的築城術を無視して建てられたと思はしめるものがないが、これは唯ソーン河の移動の結果に外ならない。この移動の事實が理解され、今日のパトナは古昔の波吒梨子城の跡なることが考古學的に證明され、而して波吒梨子城は「大般涅槃經」や「小品」に謂ふ所の波吒梨村なることが判ると、この偶然の記事が如何に多く印度古代地理の研究を助くるものなるか、自ら理解されようと思ふ。

#### 【四】

「方廣大莊嚴經」十一卷に、世尊は成道後佛陀伽耶より波羅奈へ赴かれる時、途中で阿宇婆<sup>アウヂョウ</sup>即ち活命外道に會はれることが書いてあるが、その會はれた地點は恐く佛陀伽耶と伽耶との中間であつたらうかと思ふ。即ち佛は佛陀伽耶を出

て南から北へ向はれ、阿字婆は北より南へ向つて居たので、其處に兩者の會合があつたわけである。それはこの經の文に、

「時阿字婆辭佛南行、如來北逝經伽耶城」

といつてあるによつて明白である。それから、

「次第而行至恒河邊、是時河水瀑集、平流彌岸、世尊欲渡」

といつてあるが、これも伽耶城から波羅奈へ行くには是非とも河を渡らねばならないといふ事實を物語つて居る。波羅奈へ行くとしては恒河とその支流ソーン河（河幅約二十八丁）との二河を渡つて行くのが順序かと思ふが、行き方によつては恒河一つでよいかも知れない。兎に角この恒河を渡らずしては波羅奈へは行けないことは事實である。昔も勿論さうであつたらう。

### 【五】

阿若憍陳如以下五人の比丘の落つた鹿野苑は今ベナレスの北約四哩の地點にあるが、これも古昔では波羅奈城へもつと接近して居たかと思ふ。一體比丘が城の附近に住むのはその城に入つて乞食するの便宜あるがためだが、四哩も距つた所を乞食のために毎日往返したとは信じられない。それに今から約六十年前のことセーリングといふ英人がバラナ河の西北方を掘つて建物の材料の破片である石瓦その他のものを夥しく發見したことから、この都城は現今の地點よりは遙かに北方へ擴がつて居た。語を換へて言へば、古昔の鹿野苑にもつとく接近して居たと信じてよいことになつ

たわけである。「西域記」には

「婆羅奈河東北行十餘里至鹿野伽藍」

といつてある。十餘里は六十丁餘であるから約四哩である。これはバラナ河から計つたもので古代都城から計つたものとは思はれない。現今のベナレスはバラナ河の南に限られて居るが、古昔の波羅奈は、この河よりも北の方へ延びて居た、即ち鹿野苑に近かつたことは、この古物發見によつて證明せられたといつてよい。鹿野苑住の比丘たちが日々乞食に赴べくき場所としてはバラナ河以南の波羅奈は遠きに過ぐると思ふ。

佛傳中の事實として知られたる事柄でも檀特山や雪山やを難行苦行の場所として、釋尊の檀特山に入られる所や雪山を出て來られる所を文に又は畫にしたものがないではない。然し檀特山は釋尊が因地の修行中須大拏太子として籠られた所であり、釋尊の苦行は伽耶と佛陀伽耶との中間なる、或は正確にこの地域でないにしても、兎に角尼連禪河シランヂャラーの畔なる一深林地帯に於て、あつて、雪山とは大分場處が異つて居たとされて居る。

勿論斯うした途方もない場處錯誤の例もないではないが、唯空想誇張を能事とせりと思はれる印度文學の中にも、二千數百年前の事柄を記せる佛傳の中にも、今日の地理に照して的確に契合する節あることは頗る興味あることである以上吾人は唯その著しい二三の例を擧げに過ぎない。